

河内牧方辺の太百姓の娘とて、廿九の
 十九のつとむの花と無常の風あり失せしが
 櫛笄の着物まを立派おかり埋葬せしが
 其夜娘が門の戸叩く小室内へかゝると出
 れありと騒ぐお娘のさあめ母おひら
 私棺の内ぞ蘇生アとほねども
 元の主おめつと思ふ則ち若い衆の
 蓋をわけしおフト手を出し
 去んとうけりと雲をきお遊し幸ひ
 戻つて来りて云わ兩親の言ひ娘を
 助けし思ふ知も智算定めん掛合ハ
 實の着物お眼かくれて心の欲の紛れ
 免しこれ説くを命の親と相談その實
 の河原へへんが地造みつりの塚入を
 讀むと喜号、詳也 狸昇記

大錦画の新聞紙
 六号



大阪錦画日々新聞紙 60号 文庫10-8068-42